東北工業大学
同窓会ニュース
vol.
16
2012.August

A Graduates' Association News of
TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY.

東北工業大学における
「復興絵馬～被災地域の未来を担う子供達の心の復興支援プロジェクト～」の作品

平成23年度 地域復興のための共同プロジェクト

工大人 Kodai Jin!

The network more.

2 ●ご挨拶
東北工業大学 同窓会 会長 秋元 俊通
学校法人 東北工業大学 専務理事 藤井 栄治 氏
東北工業大学 学長・復興大学事業代表 沢田 康次 氏
5 ●特集／東北工業大学における
平成２３年度 地域復興のための共同プロジェクト支援
13 ●活躍する工大人
（株）ＣＯＳ設計・曹洞宗少林寺 千葉 徹氏（建築学科 4 回生）
Love the Light lighting design office 長谷川 裕之 氏（工業意匠学科 19 回生）
東日本旅客鉄道（株） 舟腰 憲二氏（土木工学科 27 回生）
（株）セレナハウス 佐藤 隆博 氏（工業意匠学科 31 回生）
仙台高等専門学校 藤田 智己 氏（建築学科 34 回生）
19 ●東北工業大学ボランティア部の活動報告
21 ●新学部・一回生から
ライフデザイン学部 クリエイティブデザイン学科1回生 矢作 佳織 氏
ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科1回生 佐々木 彩 氏
ライフデザイン学部 経営ミュニケーション学科１回生 河野 映子 氏
23 ●支部活動報告
青森県支部シンポジウム「3.11 からまなぶ」
～どう？うごく！？ 被災するそのときに…～
25 北海道支部・岩手県支部・福島県支部・新潟県支部からの報告

☆第 28 回 定時総会のお知らせ

東日本大震災で被災した宮城県石巻市雄勝の「法印神楽」会場にて

「即戦力となる専門技術者の養成」という
母校建学の志のもと
力を結集して一日も早い復興を。

東北工業大学同窓会　会長
秋元 俊通（あきもと としみち）
1949年　仙台市生まれ
1975年　土木工学科卒（5回生）
現　　在　（株）秋元技術コンサルタンツ 代表取締役

昨年3月11日の東日本大震災では、判明しているだけでも17名の会員がお亡くなりになられましたことに、まずもって衷心より哀悼の意を表します。また、母校校舎も大きく被災いたしましたし、多くの会員も被災されておりますことに、心よりのお見舞いを申し上げます。

大震災から1年半が経とうとしておりますが、復興には程遠く、未だ復旧の道半ばといったところでございます。しかし、「即戦力となる専門技術者の養成」という東北工業大学の建学の志により、多くの会員が多方面・多分野で今回の復旧・復興にご尽力されておられることに、大いなる敬意を表させていただいております。皆様のお力を結集して、1日も早い復興を願っておるところでございます。また、母校の復旧に対しまして多くの会員の皆様から多大なるご支援をいただきましたことに篤く感謝申し上げます。

今年は、国内でも珍しい理科系人文学部であるライフデザイン学部から初の卒業生（会員）が輩出されました。本学の工学部が就職率93%と高水準であるためライフデザイン学部の平均83%は低く見られますが、国内平均を10ポイントも上回っていることから見れば、学外からの関心が高く、今後の成長が期待できるのではないかと考えております。どうぞ皆様の関係する企業等でも理科系の素養を持った文化系業務担当部門の開発に心がけていただき、ライフデザイン学部の成長にお力をお貸しいただけますようお願い申し上げます。

また、今年の当同窓会総会を10月6日（土）に開催いたします。6日から8日の体育の日までの3連休の初日でございますし、復興支援の一つとして仙台にお運びいただくというものもございますので、是非我等の母校や復旧状況をご覧いただきながら総会にご出席賜りますようご案内申し上げます。

当同窓会も会員数が3万人を越え、各地各界でご活躍されておられますので、会員の皆様にお役に立てるように「新たなネットワークをめざして」、各地に同窓会支部や集いの機会を拡大し、併せてこの「工大人」やホームページを通して各種の情報を伝達させていただいております。

今後とも皆様のご理解とご支援をお寄せいただけますようお願い申し上げますと共に、会員の皆様のますますのご健勝と東北工業大学のご発展をお祈り申し上げ、本誌発刊の挨拶とさせていただきます。

東北工業大学震災被害状況と今後の取組み

学校法人 東北工業大学 専務理事
藤井 栄治（ふじい えいじ）氏

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、それまでの予想をはるかに超える大地震に見舞われてから、1 年 4 か月が経ちました。平成 23 年度は、その震災処理に追われた 1 年でしたが、今年度は、建物等の復旧工事の一部が残っていることと、学生に対する修学支援が継続していることを除けば、ほぼ平常の状態に戻ったと言えます。

大学の被害状況を概略しますと、人的被害は、学部学生に 5 名の犠牲者が出たほか、職員の肉親にも犠牲者が出ました。物的被害額は、建物 2.71 億円、施設設備・備品等 1.02 億円合計 3.73 億円 (高校を含めた法人全体で 5.37 億円) に上りました。ただ、予想された大地震に備え、八木山キャンパスの 3，4，5 号館を中心に平成 16 ～ 18 年度に合計 11 億円を投じて計画的に耐震補強工事 (さらに、平成 20 年度、1.3 億円追加工事) を施してきたことが功を奏し、建物の倒壊等最悪の事態が回避できたことは不幸中の幸いと思っています。

これらの被害については、安全面、教育面を中心として優先順位をつけて復旧復興に取り組んできましたが、安全面 (余震)、資材面 (不足) から、破壊された耐震補強設備 (八木山キャンパス 5 号館のブレース、10 号館のダンパー) の修繕と、盛土部分が陥没した 5 号館前中庭の恒久工事は、この夏休み期間中に実施する計画で進めています。

一方、修学支援においては、家屋半壊以上、家計支持者死亡等、被害の程度に応じて学費の減免 (全額又は半額) を行いました。この額は学部学生、院生を合わせると、震災直後の予測をはるかに超える 395 名 (高校を含めた法人全体では 491 名)、3.42 億円 (同 3.61 億円) に達しました。この修学支援については、昨年度よりも支援幅を狭めたものの今年度も継続しています。

建物等の復旧、修学支援について、国からその 2 / 3 の特別補助を受けることができましたが、それでも法人にとっては大きな負担となっています。

来年度以降の支援については、大規模半壊以上についての検定料免除を決定していますが、その他のことについては、文部科学省の予算の動向等を見極めながら検討していくことにしています。

こういった中で、懸案となっていた長町キャンパス 4 号館の建設工事が、この 7 月から始まり、3 号館の改修と併せ平成 25 年 4 月供用開始となる予定で、これにより施設面の整備は一通り終了することとなります。

平成 26 年に大学創設 50 周年を迎えるに当たり、その記念事業について現在、WG を設置して検討しているところですが、半世紀にわたる活動を振り返り、改めて建学の精神に思いを馳せ、教育の充実向上はもちろんのこと、本学独自の学生指導システムである STAC の活用を含め、エンロールメント・マネジメントの徹底と、インターンシップをはじめとする就職支援に努め、社会一般、特に、地域社会に存在感を強力に訴え得る元気あふれる大学運営に努めてまいりたいと思っています。卒業生の皆さん方の絶大なるご支援、ご協力をお願いいたします。

復興大学

http://www.fukkou-daigaku.jp/

復興大学の「復興人材育成教育コースの開講式」にて

東北工業大学 学長（復興大学事業代表）
沢田 康次（さわだ やすじ）氏

東日本大震災は、これまで普通に在ったものが、突然無くなり、普通だと考えていたことが、本当にこれで良いのかと考えるようになった歴史的な事件である。きっと、明治維新や関東大震災、原爆による太平洋戦争の終結の時人の心に起きた変化は共通していることがあるのだろう。戦後の復興以来約 60 年間、我が国には、島国の為に世界の混乱から距離をおけて比較的平穏な時間が続いたが、種々のプレートが直下に沈み込む島国のもう一つの特徴が大きく表面化したのである。この震災が引き起こした日本列島地盤の歪みは別の大地震を誘発しやすい状況を醸し出し、原子力発電所の事故は、我が国にそして世界に地球の未来に関わる大きな問題を投げかけている。

また、この比較的平穏な時期に我が国が達成した経済成長は世界的にもトップレベルの豊かな生活をもたらした。その必然的な結果として、発展途上国の安い労働力を求めなければならなくなり、企業の海外進出が大きく進んだ。しかし、別の見方をすれば、我が国の技術力は発展途上国の発展のために使われ、進出した企業はいずれ其の国の技術者に支配される可能性を含んでいる。我が国の過去の右上がり時代の意識や社会の仕組みが修正されるよりも速いスピードで世界情勢の変化が起きていることが現在の混乱を引き起こしている。我が国のこのような将来に亘る問題を抱えている状態において、我々は何をなすべきか？

被災地を沿岸に持つ宮城県には２１の大学・短期大学等があり、従来から大学が地域に果たす役割は我が国のなかでも特徴的なものがあった。各大学は止むにやまれぬ気持から、震災直後から支援活動を展開してきた。しかし、単独の大学が出来る支援活動に比べて、被災地の惨状はあまりにも圧倒的である。大学が連携しても出来ることは限られている。しかし、大学が個々に行うよりも、大学間がネットワークを持って支援体制を組むことが出来れば、地域性・広域性を出すことが出来るかもしれないと考えられた。

数年前から大学間の連携組織として発足している「学都仙台コンソーシアム」は、大学間の単位互換部会、サテライトキャンパス部会、広報部会、企画部会などが活動していたので、その組織の中に支援の共同体制を組むことは比較的に短時間で可能であった。文部科学省の「大学等の復興センター事業」の一つとして平成 24 年1月から出発したのが「復興大学」である。

復興大学は、東北工業大学がそのリーダーシップをとっている。事業代表を沢田が務め、本部事務局を東北工業大学が担当している。事業は「復興人材育成教育事業」（事務局東北大学）、「教育復興支援事業」（事務局宮城教育大学）、「地域復興支援ワンストップサービス事業」（事務局東北工業大学・石巻専修大学）、「災害ボランティアステーション事業」（事務局東北学院大学・尚絅学院大学）からなり、各事業を活発に展開している。

「復興人材育成教育事業」は、東北地方の復興、日本の再生のリーダーを育成する事業で、各大学からの熱心な受講生が「復興の政治学」「復興の経済学」「復興の社会学」「復興の思想」「復興のための生活構築学」「復興の科学技術」を学んでいる。「教育復興支援事業」は、全国の教育大学と連携して初等教育の被災教育現場を支援し、「地域復興支援ワンストップサービス事業」は、既に県内２５０の被災企業を訪問し技術支援の可能性を検討している。「災害ボランティアステーション事業」は時間とともに変化するボランティアのニーズとシーズのマッチングを調整しながら支援活動を行っている。

事業の際立った特徴である県下大学・短期大学等の全てが参加する特徴をどのように生かせるかがこの事業の成否に関わっていると考えている。

「復興絵馬～被災地域の未来を担う"子ども達の心の復興"支援プロジェクト～」より

東北工業大学における

平成 23 年度 地域復興のための　共同プロジェクト支援

「気仙沼市南町および南町海岸復興プロジェクト」より

展示発表会場

本学は 1964 年の創設以来、工学の観点から自然災害に対する予知工学、予防工学、減災工学などの教育研究を、また 4 年前からは人々の安心、安全生活のデザインを目的としたライフデザイン学部を開設し、以来、様々な災害への対処について全学を挙げた学部教育と大学院教育を通して取り組みを行って来ている。このような本学の歴史的使命のもとでの教育が脈々と続いて来た結果として、「東日本大震災」後には多様な復興支援活動に直ぐさま取りかかる事が出来たと言える。一方、支援活動を通して行った学生への実践教育は、貴重な現場での人材育成手法であると同時に、次世代への伝承教育に対する指針を示すものと考える。

本学が現在までに取り組んだ（または進行中の）支援活動は、大きく分けて三つある。(1) 未曾有の「東日本大震災」直後の夜から約 20 日間に亘って行われた学生と職員による自発的な近隣町内会への給水、食料などの支援活動 (2) クラブ・サークル団体による被災企業への清掃活動である。一方、被災地域の大学として、「専門家集団として、全学を挙げた地元に根差した復興支援を行う事を第一の使命と捉えるべき」との学内機運が高まり、5 月には、より多くの被災・疲弊した東北地方の市町村の復興支援を目的に、(3) 大学組織を挙げた県内外の市町村、団体への復興支援のために実施している共同プロジェクトである。

新技術創造研究センターは、被災地域の要望を具現化し、且つ社会再生に直結した支援のために『地域復興のための共同プロジェクト支援構想』を立ち上げ、全教職員に向けて提案と参加を促した。提案された 17 テーマについて公開発表会を催し、熱気あふれる討論を通して復興支援に対するコンセンサスが形成され、理事会からの理解も得られた結果、プロジェクトの運営資金面での目処も立ち、表に示すような四プロジェクト区分 / 17 テーマが教職員と学生たちにより、6月から始まった。

本学は人々の要望に寄り添う「地域目線の支援」を大切にしたプロジェクト遂行を通して、今後も地方大学としてその使命を果たして行きたい。以下、提案 / 採択されたテーマの活動事例を紹介する。なお、文中の LD 学部はライフデザイン学部を、SD 学科は安全安心生活デザイン学科を、MC 学科は経営コミュニケーション学科を、CD 学科はクリエイティブデザイン学科を示す。

東北工業大学
新技術創造研究センター
センター長　**浅井　和弘**

プロジェクト区分	復興支援プロジェクトテーマ	プロジェクト代表者
都市再生	建築学科復興支援室を核とした継続的地域再生支援プロジェクト	渡邊 浩文 教授
都市再生	従前の土地への居住を前提とした石巻市街地および石巻漁港の復興計画	稲村 肇 教授
都市再生	気仙沼市南町および南町海岸復興プロジェクト	今西 肇 教授
都市再生	アーキエイドとの協力による石巻市・牡鹿半島の地域風景復興プロジェクト	福屋 粧子 講師
産業振興	宮城県食品工業 学生参加による販路・マーケティング支援プロジェクト	佐藤 飛鳥 講師
産業振興	宮城の地場産品復興支援「手のちから」プロジェクト	菊地 良覺 教授
産業振興	地域産業復興を支援する組み込みソフトウエア技術者向研修事業	畑岡 信夫 教授
産業振興	微細藻培養オープンポンド施設の建設－石巻の港湾復興計画について－	神 正照　准教授
調査分析	復興まちづくりに向けた創造力を育む仮設居住支援プロジェクト －地元NPOとの協働による長町仮設住宅での実践－	新井 信幸 講師
調査分析	震災関連住宅における室内熱空気環境の実態の解明と対策	石川 善美 教授
調査分析	大船渡湾水環境調査業務の支援	山田 一裕 教授
コミュニティ再生	復興絵馬～被災地域の未来を担う"子ども達の心の復興"支援プロジェクト～	近藤祐一郎 准教授
コミュニティ再生	地域住民のための防災・減災教育プログラム開発	太田 博雄 教授
コミュニティ再生	被災地の子どもたちの交通安全対策 －通学路点検と安全教育－	小川 和久 教授
コミュニティ再生	震災復興を契機とした協調型社会の促進策に関する研究	青木 俊明 准教授
コミュニティ再生	語りと記憶のプロジェクト	堀江 政広 講師

＜活動事例 1＞

建築学科復興支援室を核とした継続的地域再生支援プロジェクト

代表　工学部 建築学科　教授　渡邊 浩文

1. 目的　被災地に基盤を持つ東北工業大学建築学科・復興支援室は、時々刻々変化する被災者のニーズや行政等の目の届きにくい小地域等を対象に、きめ細かな継続的な支援を行うことを目的としている。またこれらの取り組みを通じて、大学院生・学部学生の実践的な教育の場として機能することを期待している。

2. 活動内容　これまで実践してきた活動（継続中の課題を含む）は、学生による震災直後の初期活動の記録パンフレットの製作、石巻市北上地区における漁村集落再生への基礎調査、塩竈市浦戸地区の被災状況・住民意向調査、気仙大工への大工道具提供の仲介、石巻市中心部商店街の稲荷「祠」再生支援、震災復興組織設計協議会への助言・参画、亘理町仮設住宅団地の環境改善協議、女川町支援に関する UR 都市機構との意見交換と現地視察、他団体と共催による復興支援活動パネル展の開催などである。内容もその依頼元も多種多様であり、当復興支援室は、言わば復興支援のためのワンストップ・サービス機関として機能しつつあり、またそれが社会から求められている。

今後の予定　従って当復興支援室では、学科教員による独自の活動に加え、今後とも多様かつきめ細やかな支援を継続していくとともに、活動パンフレットや年次報告書の作成、そしてシンポジウム開催等を予定している。

＜活動事例 2＞

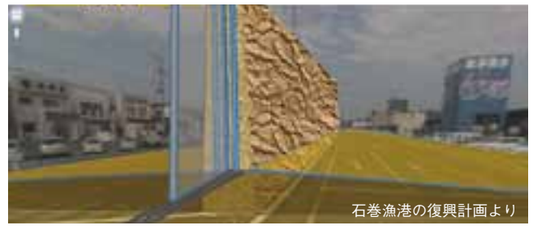
従前の土地への居住を前提とした石巻市街地および石巻漁港の復興計画

代表 工学部 都市マネジメント学科　教授　稲村　肇

1. 目的　宮城県や多くの市町村は道路の嵩上げによる第2防潮堤とその海側の住居の高台移転を伴う復興計画を立案している。しかし、これらの案が財政的にも社会的にも実行が極めて困難であることが、明らかになっている。本プロジェクトは石巻市中心部を例にとり、海岸線からの若干のセットバックや若干の集落の再編を前提としながらも、従前の居住地への復帰を基本とした被災地の防災計画、再生計画を提案することを目的としている。

2. 経緯　研究代表者等は、4月上旬に被災地のパターンごとのインフラ復興計画を提案し、宮城県、仙台市、石巻市の政策決定者に説明を行った。この具体化のため、石巻市街地及び漁港付近に焦点を絞り復興計画案を作成し、石巻市商工会議所関係者と協議、賛同を得た。6月に東北工業大学の「地域振興のための共同プロジェクト」に選定をされた。その後、計画のブラッシュアップとともに、地元との協議を漁協や水産加工組合に拡大した。10 月 17 日には地元関係者を集めて、石巻グランドホテルで講演会（説明会）を開催した。11 月2日、東北工業大学主催の「震災復興から地域再生へ」シンポジウムで国の復興予算の詳細を解説した。更に計画の具体化のために、都市マネジメント学科が主催する「観光復興シンポジウム－三陸海岸を中心として」を 1 月 13 日に開催した。

3. 取組内容　「従前の土地への居住を前提とした石巻市街地および石巻漁港の復興計画」を作成し、地元の関係者（石巻市商工会議所、石巻市漁業協同組合、石巻市水産加工業協同組合）などと協議を進め、修正を加え、成案を提案していく。内容を周知するため、随時、講演会、シンポジウムなどを開催する。


石巻漁港の復興計画より

＜活動事例 3＞

気仙沼市南町および南町海岸復興プロジェクト

代表 工学部　都市マネジメント学科　教授　今西 肇

1. 背景と目的　本プロジェクトの目的は、地域の住民および事業者の皆様と懇談を重ね、復旧復興において、土木・建築的課題を検討し、未来まで住みやすいコンパクトシティとしてのグランドデザインを行政側とも連携しながら作り上げることにある。

2. 復興に対する理念　復興に関する南町の重要な視点は次の通り。(1) 地震および津波を自然現象として捉える。(2) 科学技術の進歩を期待して自然と共存する。(3) 復興は自立を主とし、行政はこれを支援する。(4) 津波リスクを受け入れ、防潮堤に頼らない。

3. 活動報告と今後の展望　5 月 5 日から 13 回の現地踏査・懇談会（今西研究室）と、映像記録チーム（猿渡研究室）の定期的な現地取材を重ねている。また、行政へは住民の考えを第 5 次の計画案まで作成し提出した。その後、市は震災復興計画において、町の防災・減災機能の強化として、「港町の景観、風情を損なわずに、レベル２の規模の津波に対する安全性の確保をいかに図るべきか、地元住民・事業者の方々と一緒に、海からや市街地側からの見え方に配慮した防潮堤の整備、もしくは地盤のかさ上げによる安全で活気のある住商混在の街の再生について、協議・検討を行い具体的な事業を決定します。」という方針を打ち出した。そして、気仙沼市は平成 23 年 12 月 29 日、「気仙沼市魚町・南町内湾地区復興まちづくりコンペ」の実施に踏み切った。長年、気仙沼の産業、文化の拠点だった同地区の再生に向けたまちづくりアイデアを募り、市の整備計画に取り入れられることになるであろう。どのような案が採用されるにしろ、住民と市がともに復興に取り組む姿勢がつくれたことは喜ばしいことである。

＜活動事例 4＞

宮城県食品工業協議会 学生参加による販路･マーケティング支援プロジェクト

代表　LD 学部 MC 学科 講師　佐藤 飛鳥

1. 目的と特徴　本プロジェクトの目的は、震災で販路を失った宮城県食品工業協議会の会員企業に①大学生協内での販売コーナーづくり、②販路の確保・拡大、③インターネット通販を通して恒常的な販売ルートを確保・開拓して日々の生活費の糧を得ていただくことで地域復興に寄与することである。

2. 特長　研究室所属の 4 年生 8 名が参加し、学生がアイデアを出したり、活動に主体的に参加していることである。復興に対する効果は以下の 4 点で、これらに学生が関わる姿そのものが希望につながると信じている。①対象企業と事前協議し、現地に行って対象企業の商品を購入し販売すること。②宮城県産品とカテゴライズして宮城県食品工業協議会の会員企業に連携の機運をもたらし、販売時の相乗効果も狙う。③仕入れ掛け率、支払い方法、ロット数等は参加会員企業に有利な契約とする。次のステップ (他大学生協への拡大) を見据えて本大学生協にご協力いただき、新たな流通販路の足がかりとする。④短期的には販売メインだが、中長期的な実践教育効果がある。

3. 活動内容　まずは塩竈市で練り製品の製造・販売を行う宮城県食品工業協議会会員企業の (株) 高浜とコラボレーションを開始し、2011 年 6 月には同社の工場見学を実施した。同日に、用意した新商品開発案を提案した。現在は本学大学生協食堂及び売店で本プロジェクトのコーナーを開設して同社製品（さつま串揚げ 2 種）を販売中である。11 月に開催された「おおさき産業フェア」にも出展し、同社「鶏塩おでん」のブース販売は大成功を収めた。さらに、本研究室と同社の共同によるギフト商品の開発にも着手した。

本学大学生協食堂及び売店で本プロジェクトのコーナー

＜活動事例 5＞

宮城の地場産品復興支援「手のちから」プロジェクト

代表　LD 学部 SD 学科 教授　菊地 良覺

1. 目的　地域の伝統的な手仕事を主体にした技術や美意識に裏打ちされた工芸品は、地域の貴重な産業のひとつとして位置づけられている。今回の東日本大震災は、宮城県内の多くの工芸地場産地に甚大な被害を与え、生産施設や設備復旧に長時間かかる産地や生産者が多く見られる。併せて、震災直後から産地への客の入りこみの激減が見られることから、流通の供給手段も閉ざされており、新たな供給先の開拓が不可欠だ。本プロジェクトでは、県内の主な工芸の産地である秋保・雄勝・津山などを主な対象地域とし、被害状況を見据えて、段階的（短期・中期・長期）な復興支援が必要と捉え、具体的な解決策として商品開発や流通開発に取り組んでいる。

2. 活動内容　○“KIBOU プロジェクト” 手のちからオンラインショップ（出展者数 20 名）宮城県内の多くの工芸地場産地ではインターネット販売が少ないことから、販路拡大を目的に通販サイトを立ち上げた。このサイトでは、津波の被害を受けた雄勝地区への復興支援コンテンツの作成や売り上げの一部を義援金として雄勝や南三陸町に寄付される。また、宮城県内外で各地域地場産品の展示販売会を開催し、新たな流通開拓や販路拡大を図り、現在継続中である。

○南三陸町復興支援・みやぎ「道の駅」フェスティバル（開催日 9 月 17 日～ 19 日）津山町では「南三陸町復興フェスティバル」を開催。全国の道の駅から支援物資が届き、売上や残った物資は全て南三陸町の被災住民に寄付され、本学からは教職員と学生がボランティアで参加。

＜活動事例 6＞

地域産業復興を支援する組込みソフトウェア技術者向け研修事業

代表 工学部 知能エレクトロニクス学科 教授 畑岡 信夫

1. 背景と目的　組込みソフトウェアの開発は、大掛かりな装置や設備導入を必要とせず、パソコン等の比較的安価な機器を保持するだけで企業活動が可能であるので、東日本大震災により被災を受けた地域企業の復興の足がかりとしても重要な技術となっている。

本プロジェクト活動は、これからの IT 産業関連の製造業において主要な技術となる組込みシステム・ソフトウェアを取り上げ、一人でも多くの技能に裏打ちされた企業従事者の育成に寄与促進し、特に今回の大震災により被災した地域の産業を復興することにある。

2. 活動内容　具体的には、市場において急速に需要が伸びているスマートフォン（smart phone）のオープン OS として飛躍的に進化を遂げている「Android」を研修題材に取り上げ、技術者養成を実施した。この研修の成果は、株式会社 NTT ドコモ東北が計画しているアプリケーションコンテストへの応募も兼ねており、受講する社会人にとっても大きなビジネスチャンスに繋がることが期待された。特に、津波被害などにより設備・機器が消滅した企業においては、最低限、安価なパソコンを導入するだけで新規参入が可能となり、今後のユビキタス情報化社会での大きな躍進の一助になる。

本学としては、我々は今後さらに仙台市や NTT ドコモ社等の企業との連携を強化して、東北における組込み関連の産業復興に努力する所存である。

＜活動事例 7＞

「微細藻培養オープンポンド施設の建設」ー石巻の復興計画についてー

代表　情報センター　客員准教授　神　正照

1. 目的　災害復興の基盤産業として地域に密着したバイオエネルギー産業を提案し、「藻」から得られる微細藻培養技術の確立を行う。被災地にコストの低い微細藻培養施設「微細藻培養オープンポンド施設」を作り，バイオエネルギーの生産を行う。施設の建設場所として、石巻市の港湾地域に施設を作る。予定地の場所は石巻市の鮎川地域である。

2. 今後の予定　「藻」の育成施設が建設されれば、将来バイオエタノールの抽出を行い、クリーンなエネルギーとして利用する。「藻」から得られる原料からは、健康補助食品、魚の餌、飼料にも活用する事が出来る。

＜活動事例 8＞

復興まちづくりに向けた創造力を育む仮設居住支援プロジェクト —地元 NPO との協働による長町仮設住宅での実践—

代表　工学部　建築学科　講師　新井 信幸

1. 背景と目的　今回の東日本大震災で生活の基盤を失った多くの人々が、震災直後から避難所における仮設住宅での厳しい生活を余儀なくされている。その厳しい生活環境の中において少しでも心豊かな暮らしを営んでもらうために、本プロジェクトでは仮設住宅のカスタマイズ支援活動を行っている。仮設住宅での不満や不便さを解消するため、居住者に簡単な作業を提供し仮設住宅に豊かな表情が生まれていくことを目的としている。加えて、外での作業を通じ居住者同士のコミュニケーションが生まれる事で新しいコミュニティが形成され、これを通し、ここでの生活の活路にも繋がっている。

2. 活動内容　居住空間の改善を体験する『仮設カスタマイズ』は、無機質な仮設住宅の居住空間を入居者自らが改造して、機能性の向上とともに居場所を生成させていく行為であり、こうした体験が復興まちづくりへの意欲と創造力の向上につながると考える。仮設住宅暮らしを耐え忍ぶのではなく、復興のまちづくりへの指針となることを期待する。

本プロジェクトでは、「あすと長町仮設住宅」において、地元ＮＰＯと連携して、「体験する」「知る･共有する」「つぶやく」といった３つのフェーズの居住支援プログラムを実践している。

(1)『仮設カスタマイズ』　～居住空間の改善を「体験する」～　軒先収納･縁台、共同菜園、屋台等の制作　(2)『住まいまちづくりワークショップ』～復興への情報と思いを「知る･共有する」(3)『ふれあいサロン』～不安を「つぶやく」ことができる交流イベントを通じて和やかな雰囲気のなかで小さき声（つぶやき）を拾い集める。

長町仮設住宅での実践

＜活動事例 9＞

震災関連住宅における室内熱空気環境の実態の解明と対策

代表 LD 学部 SD 学科　教授　石川 善美

1. 背景と目的　今回の大震災の復興において、各地で極めて短時間のうちに大量の仮設住宅が建設されている。このような住宅は、その構造や材料、設置される住宅設備などに大きな制約があり、建設される地域の気候条件などとあいまって、現状では、室内空気質、温熱環境において多くの課題が予想され、建築環境工学の観点から緊急的な研究を実施する必要がある。

本研究は、このような住宅の室内熱空気環境の実態を調査して、問題点の抽出とその改善および対策に関する基礎資料整備を行うことを目的とする。調査は、仙台市および宮城県内の仮設住宅地から 3 箇所を選び、住戸の位置、家族構成などが異なる 17 戸を対象に、室内温湿度や二酸化炭素濃度の実測などを行うものである。住戸によっては、夏の日ざしをしのぐための緑のカーテンの設置や遮熱塗料の塗布、または、折版屋根に空き缶を敷き詰めて空気層の効果をねらった工夫などがみられる。これらの工夫の効果を調べることも、今回の研究目的の一つである。

2. 活動報告と今後の展望　これまでの結果としては、仮設住宅の室内は、夏の厳しい暑さ、冬の厳しい寒さにさらされており、室内にむきだしになっている鉄骨ブレースの熱橋の問題、さらには一部の住戸では非暖房室における大量の結露とカビの発生などがあることが明らかとなっている。また、ヒアリングでは、暖房設備、換気、音の問題もある、と聞いた。これらの原因はひとえに貧弱な建物性能によるものであり、今後、行政サイドに対して何らかの環境改善方法の提言、および居住者に対して適切な住まい方の示唆などが必要と思われる。

＜活動事例 10＞

大船渡湾水環境調査業務の支援

代表　工学部　環境情報工学科　教授　山田一裕

1. 背景と目的　本プロジェクト代表の山田は、岩手県大船渡湾の水環境調査(民間企業に業務委託)について、委託先選定から調査計画･報告書のとりまとめについて、専門評価委員として本業務を被災前から支援してきた。今回の被災にあたり、大船渡市担当者から被災直後の調査重要課題の助言を求められ、5 月末に今年度の調査計画がまとめられた。一方で、湾口防波堤の倒壊など、通常とは異なるため、本調査の同行とその都度の意見･情報交換、および湾内流入河川の水質調査活動を通して、今後の大船渡湾水環境管理に対する専門的支援をめざした。

2. 活動内容　まず、被災後の大船渡湾調査の調査結果については、大船渡湾水環境保全計画推進協議会（12 月 21 日開催）で公開された。6 月から月に 1 回の頻度(合計 5 回）で調査は実施された。当初、懸念された有害物質による湾内汚染は無く、健康や水産業への懸念はまずは払拭された。汚濁状況についても、COD（有機汚濁の環境基準指標）は昨年度よりも低く、慢性的な汚濁状況が改善されていた。これは、湾口防波堤の倒壊により外洋水と湾内の水交換が進んだことが原因と考えられた。

つぎに、独自調査として湾内流入河川の水質調査を 2 回実施した。結果として、河川の汚れは確認できなかった。一方、被災した下水処理施設による簡易処理水の放流先では強い下水臭が漂うとともに、数百 mg/l の高 COD 値、大腸菌群数も高かった。下水処理施設は、平成 24 年 1 月には本格的な生物処理が施される予定であり、湾内への汚濁負荷の軽減がさらに進むものと期待される。

今後も調査業務の立案・計画に従い水環境管理への専門的な助言や情報提供などの支援は継続する。

＜活動事例 11＞

東日本大震災が道路ネットワークに及ぼした影響について

代表　工学部　都市マネジメント学科　教授　村井 貞規

1. 目的　東日本大震災による津波が宮城、岩手の道路ネットワークに及ぼした影響を明らかにし、今後の沿岸地域の道路整備のあり方について検討する。

2. 活動内容　プロジェクト参加者からの正確な資料に基づいて、道路ネットワークの被災状況と復旧状況を明らかにする。整備が進みつつある三陸自動車道が果たした役割と、整備されていない地域に生じた問題点について調査する。孤立集落が生じた状況を明らかにする。東日本大震災と歴史津波との道路被災状況の比較。

3. 今後の予定　宮城県、岩手県の沿岸地方の主要な道路の調査・分析。宮城県北部の主要都市の津波被害の分析。三陸道の果たした効果についての分析。

＜活動事例 12＞

復興絵馬 ～被災地域の未来を担う“子供達の心の復興”支援プロジェクト～

代表 工学部 環境情報工学科 准教授　近藤 祐一郎

1. 背景と目的　3月 11 日に発生した大震災は未曾有の規模であるため、復興には長期的かつ継続的な取り組みが必要となる。ゆえに、大人のみならず子ども達も交えた取り組みが望まれる。しかし、まだ子ども達の心は十分に癒えていない。そこで、復興の第一歩は子ども達の「心の復興」からであるとの認識に立ち、仙台市立七郷小学校とともに本プロジェクトを立ち上げた。

2. プロジェクトの内容　当時避難所だった七郷小は多くの救援物資が届けられた。この時のダンボールを再利用し絵馬を制作した。５年生 160 人が表面に願い事を絵で描き、裏面には願い事を文章で書いた。この絵馬は七郷神社で祈祷してもらい、どんと祭でお焚き上げしてもらう。その間、仙台市役所など被災地を巡回し展示される。

3. 現在までの状況と今後の予定　絵馬の歴史と意味についての講義（11/04）、絵馬の制作（11/16）、絵馬の絵付け（11/18）、撮影（12/01）、アンケート調査（12/12）

を終えたところである。今後はアンケートから「本プロジェクトの効果」や「子ども達の心の癒し」などについて調査し、その結果をもとに「心の復興（ケア）」策立案を行う。一方、制作した絵馬は作品集としてまとめ、子ども達や関係各所へ配布する。来年度も新５年生を対象に継続して行う予定である。また、既に市内の小学校から実施要請があった。少しずつではあるが、しっかりと前進したいと考えている。

復興絵馬 ～被災地域の未来を担う“子供達の心の復興”支援プロジェクト

＜活動事例 13＞

地域住民のための防災・減災教育プログラム開発

代表　LD 学部 SD 学科　教授　太田 博雄

活動内容　仙台市の八木山地区、東中田地区、石巻市の３地区を対象に調査を行った。今回の震災被害は津波の有無や地盤の問題など地域によって大きく異なることが特徴であった。石巻は津波による被害が大きかったが、特に車による移動中の被害者が多くみられたことから被災時の車の利用問題を取り上げた。八木山地区は高齢化が進行しており、高齢者の安全を焦点とした。東中田地区は津波被害のあった地区に隣接している。地区内の住民自身の保身とともに避難者の受け入れなどの問題も含む地区であった。

平成 23 年 11 月 25 日に八木山地区市民会館において「東日本大震災シンポジウム」が開かれた。参加者 270 名に対してアンケート調査を行った。調査では、シンポジウム参加者を対象に、世代を超えた支援体制づくりとして、若者の参加についての期待をたずねた。回答者中、若者の防災・減災活動への参加を 94％が切望している結果となった。高齢化社会において災害時の若者による支援への期待は大きい。本学学生を対象にしたアンケート調査を震災後７月に行ったところ、学生の多くがボランティア活動に参加していたことが明らかになった。このことは、学生たち若者が震災という非常事態において積極的な活動を自ら行っていたことを意味しており、若い世代の可能性が期待できることを示すものであった。この可能性を生かすための組織的な防災教育プログラムを組むことが今後必要となる。

＜活動事例 14＞

被災地の子どもたちの交通安全対策 －通学路点検と安全教育－

代表 共通教育センター 教育課程部 教授　小川 和久

1. 目的　交通事故という二次災害の防止が本プロジェクトの目的である。震災復興が進むにつれて交通量が増えつつあり、子どもたちの事故リスクが高まっている。今回の震災を生き延びて守った大切な命を、震災後の事故で失うことのないよう、安全教育を一層充実する必要がある。

2. 活動内容　今回、人形劇を用いて、学校周辺の危険な交通状況と危険回避行動を学習する教育を試みた。仙台市太白区東四郎丸児童館の協力を得て、周辺地域に住む小学生約 100 名を対象に教育を実施。当該地域は津波の被害はなかったものの、被災地域と隣接した位置にあり、周辺道路を復興関連車両が行き来する環境にある。

人形劇のシナリオは以下の通りである。
①子どもたちがよく利用する公園と付近の横断歩道を、劇中の場面として設定。②老人と子ども、子ども同士、親子の会話などをシナリオに含め、飛び出しの危険性、安全な道路横断の方法、具体的な確認行動について理解する内容とした。③人形をモデルにした安全行動（「止まる」「確かめる」）を、劇を観賞する子どもたちが観察学習する内容とした。

本学学生 6 名が主体となり人形劇を実演。人形劇のシナリオは、学生によるオリジナルであり、劇に必要な小道具も学生自らが制作した。引き続き、関係機関と連携をとり、地域での交通安全教育の普及に取り組みたい。

＜活動事例 15＞

震災復興を契機とした協調型社会の促進策に関する研究

代表　LD 学部 MC 学科 准教授　青木 俊明

東日本大震災では、多くの人が自宅を失い、仮設住宅暮らしを余儀なくされている。慣れぬ仮設住宅での暮らしには、多くのストレスが伴うことは容易に予想できる。例えば、仮設住宅の入居者は抽選等で決まるため、そこでは新たにコミュニティーが形成されることになる。しかし、高齢者が多い仮設住宅地区では、コミュニティーの形成は容易ではない。適切な近隣関係が醸成されなければ、“コミュニティー不適応”とも呼ぶべき問題が生じ、仮設住宅居住者はさらなる苦難を背負うことになる。そのため、仮設住宅地区での“コミュニティー育成”は、トータルとしての震災被害を軽減する上で重要な課題となる。

ところで、東日本大震災は多くの人が行動や価値観を再考する機会になった。震災後、不便な暮らしを強いられる中で、多くの人は互いに協力し、苦難を緩和した。利己主義が問題視される現代社会において、相互協力を経験することは協調社会の体験という意味で大きな意義を持つ。一定期間の間、こうした体験が続いたことにより、価値観が変化し、住民に協調行動が増えた可能性がある。この仮説を検証すれば、「協調行動の促進に必要な体験」が明らかになり、コミュニティー活性化策の提案につながる。さらに、仮設住宅居住者のコミュニティー問題も改善できる。そこで、本プロジェクトでは、被災後の生活ストレスや行動傾向、コミュニケーション傾向を計測し、個々の関係を明らかにする。それにより、協調社会への移行促進策や仮設住宅居住者の生活ストレス軽減策を提案する。

＜活動事例 16＞

語りと記憶のプロジェクト

代表　LD 学部 CD 学科 講師　堀江 政広

1. 目的　東日本大震災により、我々は多くのものを喪った。「語りと記憶のプロジェクト（http://horie.design.tohtech.ac.jp/311memory/）」では、東日本大震災で似たような経験を持つ人々同士が、空間を共有して語り合うことによる癒しと、そこで語られたコトを未来に伝えていくことを目的としている。

2. 活動内容　2011 年は、5 回の「語りの場」を設けた。「語りと記憶のカフェ」では、テーマを「あの時の食を聞かせてください」とした。参加者はお茶とお菓子を楽しみながら、カードに震災時の食に関するエピソードを文字と絵で書き、そのカードについて語った。参加者の作ったカードを宮城県とその周辺の白地図に貼り、場所によるカード内容の比較を行った。他の「語りの場」のテーマは、「あなたの震災ボランティア体験を聞かせてください」、「あなたが未来につむいでいきたいものは何ですか?」、「震災であなたの音楽は変わりましたか?」、「メディアの森はどうあるべきか：ポスト 3.11 の語りと記憶から」である。

これらの活動から、同じような体験・境遇を持ち、興味関心ごとが同じ相手には語りやすいことが明らかになった。加えて「限られた時間では語り足りない」という、来場者の意見もあった。このことから、時間の制約がなくとも語れる場を作ることの必要性もあることがわかった。今後は活動から得られた「語り」のアーカイブのためのアプリと、本（電子書籍）を制作する予定である。

『高等教育ライブラリ３　東日本大震災と大学教育の使命』
（東北大学高等教育開発推進センター編 / 東北大学出版会 /2012 年）
第７章「東北工業大学における“地域復興のためのプロジェクト支援”」より全文転載

活躍する工大人

諸行無常、無常迅速

（株）COS設計　代表取締役会長
曹洞宗少林寺住職
千葉　徹（ちば とおる）氏
1949 年生まれ
1973 年　建築学科卒業（4 回生・田中研究室）
資格：建築構造設計 1 級建築士

はじめに、東日本大震災によりお亡くなりになられた方々に対し、謹んで哀悼の誠を捧げますとともに、被災された方々に対しましては、心からお見舞いを申し上げます。

私は今、気仙沼というところにある少林寺という禅寺の住職をしています。嫁さんの実家なのですが、前住職の義父が跡継ぎを作らないまま他界してしまい、まったく思いがけず坊さんになってしまいました。

幼い頃から医者になる夢を追い続け挫折。考えたこともなかった建築の世界に入り 40 年、60 歳になって発心し奥の正法寺にて 1 年半坊さん修行をし、一昨年の 10 月に新米住職として寺に入り今に至っています。

一応、師匠老師からは一通りのことは伝授されるのですが、新米にうまくやれるわけはありません。葬儀の仕方からなんから、失敗の連続です。諸先輩のお坊さん達からは数をこなす内にできる様になるからと言われるものの葬儀は遺族にとって正に真剣そのものであり、滞りなく行いたいし、また坊さんの言葉 (法話) の中に慰めや癒やし、励ましを求めていられる訳で、これにも応えていかねばなりません。

そして、去年 3 月 11 日の東日本大震災です。元々構造屋ですから建物被害がまず先に思い浮かびました。応急被災度判定、被害調査等、動きださなければ…。しかし、どこにも連絡がとれません。12 日には寺は被災された人たちの避難場所となり被害の大きさが判ってきました。

数日後、なくなった檀家さんの葬儀依頼が入り始めました。少林寺の檀家さんでは子供も含め 70 名あまりの方々が亡くなりました。残された遺族の気持ちを考えると、亡くなられたお一人お一人について念入りな葬儀をしなければと思いました。連日の葬儀が 3 ヶ月ほど続きました。人に寄り添うことの大切さが身に染みました。この 1 年で数年分以上の経験と僧侶としての心のあり方を教えてもらい成長させて頂いたと感じています。

諸行は無常である。全ての事は何一つとして変わらないものはない。一瞬々変わっていくと言うことであり、無常は迅速であり、とてつもなく早く来るということです。まさに世の中何が起こるか判らない。このたびの震災もそうですし、人の人生も何が起こるかわからない。今生きているこの一瞬を大事に生きることが大切なんでしょうね。

さて、建築の方はというと、(株)COS 設計社長を退き取締役会長となり実務からは一応離れている状態です。地元のお役に立てればと気仙沼に COS 設計気仙沼事務所を開設していまして、所員が一人常駐しております。仙台本社には社長以下 10 人程社員がおりまして主に構造設計をしています。

大学のインターンシップにも協力していまして、一昨年 2 名の学生を気仙沼事務所でお引き受けしました。期間中お寺に泊まり込んで頂いての実習でした。今後も受け入れて行くつもりですが、せっかくお寺に合宿するのですから、座禅などお寺ライフも経験してもらおうかと思っております。

東北のあかり文化を生み、育てて行きたい。

Love the Light lighting design office 代表
長谷川 裕之（はせがわ ひろゆき）氏
1966 年　北海道根室市生まれ
1989 年　工業意匠学科卒（19 回生・佐藤研究室）
　　小泉産業（株）（現：コイズミ照明）入社
1990 年　同社　LCR（環境デザイン）所属
2012 年　Love the Light lighting design office 設立
［受賞歴］
1996 年　環境照明デザイン　佳作
1997 年　環境照明デザイン　銀賞
http://www.lovethelight-lightingdesign.com/

1989 年 3 月に大学を卒業後 23 年間、照明メーカーで商品開発、環境デザイン、営業開発と作る側・売る側の経験を経て、3年前に仙台に転勤をしてきました。

当時、私は照明器具を推奨する上で、製品の特徴を生かした照明デザイン・LED を中心とした省エネの提案活動をしていましたが、思うことがあって 2012 年に独立しました。

東日本大震災以降、売る側主導で推奨されている省エネ活動に対し、違和感というのか疑問のようなものを感じ始めています。また、日本全体を見たときに、東北は『あかり文化』に対し、首都圏に依存し遅れていると感じる事もあり、東北としての『あかり文化』を創りたいと思ったのが始まりでした。

東北では照明環境に対する快適性は、明るさだけが優先されているのが現実です。

明るさを優先させる事で『体内時計への影響による不眠障害』、『不眠障害から生じるストレス』、『子供達の慢性的睡眠不足による学力低下』など安全・安心の認識から、実は、人に生理的な影響を及ぼしているのが現実です。ブルーライト問題もその一つです。

また、省エネと明るさを求める事で、過剰な LED 照明の使用と売る側の利益の追求や効率を優先するといった、誤った活動が誤った環境負荷が起きているのも事実です。

その上で、ここ東北という土地の風土に根ざした『暮らしのあかり』のかたちがあるのではないか、と思ったのも独立のきっかけでした。

独立後も、照明環境デザイン・製品の企画、デザイン、設計をしており、現在は建築設計事務所や御施主に対し、プロモーションを含め照明デザイン事務所ができる事を説明しています。

東北では照明デザインが浸透していない分、風土として定着するまで時間が掛かると思いますが、今後は『東北のあかり文化』を生み、育てて行きたいと思います。これから東北の風土が持つ本来の『あかりのあり方』を探しながらのんびりと、でも着実に創り上げていきます。

作品：セレモアつくば

JR 仙石線の被災車両

工大と震災と私のつながり

東日本旅客鉄道（株）
舟腰 憲二（ふなこし けんじ）氏
1974 年生まれ
1997 年　土木工学科卒（27 回生・小出研究室）
1999 年　工学研究科　土木工学専攻　博士課程（前期）終了
1999 年　東日本旅客鉄道（株）入社　東北工事事務所配属
2006 年　　東京工事事務所勤務
2008 年　本社　建設工事部勤務
2009 年　本社　信濃川発電所業務改善推進部
2012 年　現職　東北工事事務所　復興推進（仙石 G）

はじめに、東日本大震災で亡くなられた方々へのご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

3 月 11 日（金）午後、私は当時の職場である東京から出張で採用の学校担当者として、東北工業大学で会社説明会を行っておりました。まさに、工大の 7 号館で M9.0 の地震に遭遇したのです。一緒の部屋にいた学生には、机の下に入ること指示し、前月に起こったニュージーランドでの地震でビル倒壊の映像が頭をよぎり、「7 号館は耐震上大丈夫？だろう」と思い聞かせながら、揺れが収まるまで待ったことを覚えております。揺れが収まった後は、グランドに出て避難しておりましたが、余震も八木山の TV 鉄塔が折れるのではないかと思うほど大きく何回も訪れ、あっという間に時計は 15:15 を示していました。その後、就職担当だった恩師の小出先生の車で八木山を下り、車の中の TV で未曾有の津波が襲っていることを知りました。当分自宅と職場に戻ることは不可能と覚悟し、入社当時の職場がある JR 仙台支社ビルにある東北工事事務所へ向かい、1週間、復旧対策本部に入り、昼夜を問わず施設の被害状況調査、復旧方法の検討を行いました。

その後、会社の配慮があり、何とか車で家族が待つ自宅へと帰ることができましたが、寝る間も惜しんで復旧作業にあたる東北工事事務所の仲間を思うと後ろ髪を引かれる思いであったことを記憶しております。

この経験があったこともあり、「東北の復興の仕事に携わりたい」という気持ちは次第に強くなり、チャンスがあればと希望をしていました。運良く平成 24 年 3 月、震災から 1 年を前に私は JR 仙石線の復旧を担当させて頂くことになりました。

私が担当した JR 仙石線陸前大塚～陸前小野間は、線路が流失するなど特に大きな被害を受け、復旧計画について宮城県、東松島市及び国土交通省と一体となって計画を進めてきました。昨年度末、東松島市の高台移転となるまちづくり計画にあわせて山側へ線路の移設および東名、野蒜両駅を移転することで決定し、現在は、詳細設計を行っているところです。さまざまな課題は山積みですが、JR 仙石線の早期開通を待っている方々のために、1つ1つ課題を解決しています。一番の課題はスピードです。通常の工事であれば 4 ～ 5 年はかかるであろうと思います。そこを " 工事着手から 2 年で開通 " を必達目標に設計・施工方法、社内外手続きに至るまで、技術と知恵を集結して計画を進めております。

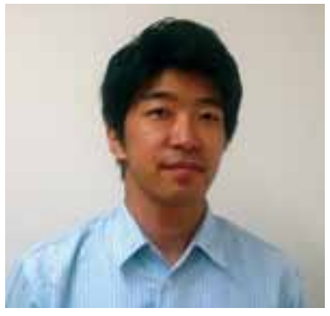
震災から間もなく 1 年半が経とうしておりますが、津波で被災した現地を見るたびに、まだまだ復興には時間が掛かると実感すると同時に、1日でも早い復興に向けて「自分がやらなければ！」と気持ちを奮い立たせている次第です。

最後に、私がここまでやってこられたのも、工大で学んだ知識とお世話になった方々のお陰だと感じております。今後も一人でも多くの工大出身の先輩、後輩と何らかの形で、一緒に仕事できるのを楽しみにしておりますので、これからもご指導のほどよろしくお願い致します。

震災後（JR 仙石線東名駅から石巻方を臨む）

家と家族の時間を再生することが私の役目

（株）セレナハウス　代表取締役社長
佐藤　隆博（さとう　たかひろ）氏
1977 年　仙台市生まれ
2001 年　工業意匠学科卒（31 回生・舛岡研究室）



私の父親は大工の棟梁で、子供の頃から、家には木が転がっており、木の端材を使っていつも何かをつくっていました。しかし、何故か、将来は大工さんではなく建築家になりたいと幼少の頃から思っていました。

大学を選考する際、物づくりと建築デザインを一緒に学べる大学として、東北工業大学工業意匠学科を選び入学しました。大学では建築以外にも、物づくりの基本をいろいろ学ぶ事が実際にできたと思います。

大学卒業後は、建築家の磯崎新氏の設計事務所に入社する事ができ、住宅や公共建築と、日本だけではなく、世界での建築の仕事を経験する事ができました。その後も建築家の下吹越武人氏の設計事務所での仕事を経験し、ここでは建築の実務的な仕事ができました。そして、今から8年前に友人の家を建てる機会があり、仙台に帰ってきました。

現在は、父親の工務店を引継ぎ代表として、地元住宅メーカーとして、地元の家づくりをしております。

今思えば、大工さんも、設計事務所も家をつくるという事には、何の変わりなどはなく、どのように家を創ればいいのか、という事が一番大事に思います。

建築という仕事は、家の、外の形をまず考えがちですが、大事な事はそこへ住まう人の生活を中心として家つくるとう事です。生活の行為を良く考え、家をつくるとう事が重要だと、今思います。これは、大学で学んだ物づくりの考えの元となっています。今、このような思いで、お客様の家づくりのお手伝いをしています。

東日本大震災で、東北工業大学の恩師、舛岡和夫氏の宮城県山元町のご自宅が被害を受けました。それは古民家を移築した住宅で、古民家に住まいながら住いや地域の事を研究してきた家として、恩師の知人や学生が関わってきました。

同町の他の被災住宅は、町が解体をしましたが、この舛岡邸は、町で唯一移築する事を決め、今も現地に残して現在移築計画を進めております。

被災した「舛岡邸」

東日本大震災で私が出来る事は、一つ一つの家と家族の時間を再生していく事が役目であると思います。その小さな活動の集りが、街づくりに繋がっていくと考えております。

震災からの復興と地震被害低減に向けて

仙台高等専門学校 建築デザイン学科 助教
藤田　智己（ふじた　ともみ）氏
1981 年　青森県弘前市生まれ
2003 年　建築学科卒業（34 回生・船木研究室）
2008 年　建築学専攻博士後期課程修了

東日本大震災から１年４ヶ月が経過致しました。改めて、この震災によりお亡くなりになられた方々に対しまして、謹んで哀悼の誠を捧げますとともに、被災された皆様に対しましては、心からお見舞いを申し上げます。

震災以降、東北工業大学の多くの卒業生の皆様方が震災復興のために御尽力し、御活躍されているものと拝察致します。私も微力ながら復興のお役に立てるよう努めていきたいと考えております。

私は 1999 年に建築学科に入学し、大学院の修士課程、博士課程の修了まで９年間の学生生活、その後、運よく建築学科の助教として採用して頂き、10 年を超える間、東北工業大学に籍を置かせて頂いておりました。現在は、名取市にあります仙台高等専門学校にて教鞭を執っております。私が現在の教育研究職を目指したのは、学部４年時に配属された船木研究室に始まります。そこで、恩師である船木先生、また船木先生の恩師であられる東北工業大学名誉教授の川股重也先生と出会い、先生方の研究する時の生き生きとした姿に心魅かれたことを今でもはっきりと覚えています。多くの先生方には教育研究職には就くことは難しいから、普通に就職しておけと何度も言われてきましたが、その中でも船木先生は、『やりたいことがあるなら続けた方がいい。俺も手助けするから』と言って下さりました。その言葉が当時の私のやる気と勇気に繋がっていました。改めて、船木先生に深謝の意を表します。また、オーバードクター問題が深刻であり、博士号を取得後も就職先が無い現在において、運良く現在の職に就けたのは、多くの先生方の支えがあったからです。この場を借りて御礼申し上げます。

学部４年の船木研究室配属から『地震に対して安心な建物』を研究テーマに、現在も微力ながらその一助となるべく研究に従事しています。震災以降は船木先生とともに、東北地方太平洋沖地震で被災した小中学校の被害調査を行っています。30 年以内に 99%の確率で来襲すると危惧されていた宮城県沖地震に備え、県内の建物では耐震診断・補強を行ってきました。それら建物が大地震によりどの程度の被害が出ているかを調査し、現行の耐震診断・補強の妥当性を検証することが目的です。大地震は日本全国で発生することが危惧され（例えば、首都直下地震・東海、東南海地震等）、現在各地で耐震補強の実施が盛んに行われています。この調査結果が今後の耐震補強の一助となり、我が国をはじめ世界における地震被害の低減に繋がることを望んでいます。

最後になりますが、東北工業大学の益々の発展と同窓生の皆様の御活躍を心よりお祈り致します。ありがとうございました。

船木先生と中国の学会にて

東北工業大学　ボランティア部の活動報告

「東日本大震災から今」

東北工業大学ボランティア部は、平成１８年４月に工大生のボランティア意識の向上及び興味のある学生に対する窓口として発足しました。当初は部員数も少なく小さな愛好会でしたが、今では部員数 53 名のとても大きなサークル団体に成長しました。結成以来、多くのボランティア活動に参加し６年連続で課外活動成績優秀団体賞をいただいています。私たちの活動が評価され、うれしい気持ちとボランティア部の礎を築いてくださった先輩方への感謝の気持ちが溢れてきます。

平成 23 年 3 月 11 日、私たちが忘れもしない東日本大震災が起こりました。震災直後は周囲の混乱やショックがあまりにも大きくボランティア部として活動することができませんでした。やがて周囲が落ち着き始めた頃、ボランティア部としての活動を少しずつ再開し、そして今でも被災地での活動を続けています。

今まで携わってきた団体や先生方を含め多くの人々が震災へ目を向けました。震災前から協力させていただいていた日本盲導犬協会さんの、盲導犬育成のための募金活動から、被災した盲導犬ユーザーのためへと対象を変更し募金活動を行いました。また、工大の先生方の協力のもと「震災復興プロジェクト」として「南三陸復興支援・みやぎ道の駅フェスティバル」、「秋保ゆきんこまつり２０１２」への参加もしました。６年間で積み上げてきたつながりの輪が大いに役立つことになりました。

そして震災後、新たに取り組んだ活動が「足湯ボランティア」です。この活動は、震災直後から被災地で活動し続けているレスキューストックヤードさんのもと、仮設住宅周辺で被災者のための足湯を運営する活動です。この活動は被災者の心と深く関わったものです。仮設住宅には今まで面識のなかった人々が一ヶ所に集うことになり、それがストレスとなっていることはメディアを通してよく耳にしたことがあると思います。足湯を通して被災者のストレスを解消し、集まった人々の間にコミュニティを築き上げることが目的となっています。この活動で私たちは、被災者が足湯を使う際に利用者の手をもみほぐしながら話し相手になります。人の心に寄り添う必要がある面やコミュニティができていることを目で確認することができないなど、がれき撤去のようなボランティアとは違う難しさを感じています。それでも、利用者の方からこぼれる「ありがとう」の言葉や笑顔が私たちの活動力となり、必要とされる限り続けていこうと考えています。

現在、被災地ではまだまだ復興へのボランティアを必要としています。ボランティアのニーズが変わりつつある今、私たちボランティア部ができることを考え、部員全員でこれからのボランティア部を作り上げていきます。

東北工業大学　ボランティア部　部長　**田中 真斗さん**

ボランティア部一同

東日本大震災以降、地元である宮城県七ヶ浜町で足湯ボランティアを続けてきました。現在は NPO の現地スタッフとして活動をしており、震災から 1 年以上が経った今では、活動回数 150 回、利用者 2,166 人、ボランティア 1,028 人以上となりました。

足湯ボランティアとは、お湯に足を浸けてもらい、手のもみほぐしをしながら会話をするというもので、現在は仮設住宅にお住まいの方を対象に集会所で活動しています。町にあった瓦礫は多くのボランティアによってキレイに片づけられましたが、人々の心に刻まれた津波の恐怖というものは簡単には消えるものではありません。これからは人の心に寄り添い、1 人でも多くの人が少しずつ前に歩んでいけるように側で支えるボランティアが必要だと思います。

安全安心生活デザイン学科 ２年生　**清水 玲奈さん**

新学科・一回生から

2008 年に設立され、今年一回生を送り出した
ライフデザイン学部 3 学科の卒業生からのメッセージです。

経験を活かして

（株）ユーメディア　営業部
矢作 佳織 (やはぎ かおり) 氏
2012 年　ライフデザイン学部
クリエイティブデザイン学科卒
(堀江研究室)

現在、私は株式会社ユーメディア　営業部に所属しています。

ユーメディアはお客様の要望を最適なメディアと技術で総合的に実現するコミュニケーション支援企業です。印刷物、イベント企画、デジタルコンテンツのような様々なコミュニケーションツール、またはS-style、kappo、machico などの自社媒体といった様々な手法が形づくる「総合力」で、お客様の問題解決に取り組んでいます。グループ会社にプレスアートと仙台シティエフエムを有し、仙台エリアでの情報編集、発信を通して地域活性化支援企業を目指しています。

営業部では、お客様の要望を実現するのに一番適している手法や組み合わせはどんなものなのか？また、それはどれくらいの時間と金額で実現可能なのか？具体的な手法や日数、金額を、実際にお客様とやりとりをし、案件を進めることで日々学んでおります。

営業はお客様と一番近い立場であり、お客様と、お客様の要望を実現するものの橋渡しであると考えております。そのためにはお客様の立場になって物事を考えるだけではなく、物事に携わるデザイナー、プランナー、オペレーター、業者など様々な立場のことも知らなければなりません。また、お客様の要望を的確にとらえ、それを別の立場に的確に伝える伝達力が必要です。

私は、クリエイティブデザイン学科でビジュアル、エクスペリエンス、プロダクトの実習を通して制作側の知識、技術を学ぶことができました。これらの経験が、お客様への提案力、制作側への伝達力の大切な基礎になっていると感じます。また、実習や企画で物事をはじめから終わりまでやりとげる力、ものづくりに必要なものを導き出していく力を養う工大の教えが現在の業務に活かされていると強く感じます。

現在、工大で学んでいる皆様は、大学の勉学に加えて是非とも色んな経験をしてください。普段から自分のアンテナを伸ばし、少しでも興味を持ったら飛び込んで、自分の視野を広げていってください。良いもの、美しいもの、好きなもの、得意なもの。色々なものを見て世界を知ることで自分自身のこともおのずと見えてきます。自らのやりたいこと、やるべきことが見つかれば1日の時間の使い方が変わります。

東日本大震災から1年が経ち、私たちは東北の復興、さらにその先の未来を実現するために歩まなければなりません。その未来を創るための第一歩として、しっかりと着実に業務を覚え、それを活かしてお客様に、会社に、そして社会に役に立つ存在になれるよう邁進してまいります。

住み手（使い手）の立場に立った質の高い生活デザインを目指して

東和総合住宅 (株)
佐々木　彩（ささき あや）氏
2012 年　ライフデザイン学部
安全安心生活デザイン学科卒
(菊地研究室)

東日本大震災から１年３ヶ月が過ぎ、テレビなどで震災についての報道が大幅に少なくなってきたように思いますが、被災者・被災地の今はどう変わってきたのだろうかと日々思いつつも、新米社員として忙殺の日々を送っております。

私は震災があった去年、就職活動中でした。約２ヶ月間就職活動が停止しました。その期間においては、自分が「生活する（生きる）」ということしか考えられませんでしたが、帰る家がある、家族が居る、とても幸せなことだと気付かされました。だからこそ、幼い頃からの夢であった建築･住宅関係の仕事に就き、困っている人の力になりたい、求めている内容やモノを形にしたい、復興へ関わっていきたいと思い、現在の住宅関連を専門とする会社に入社しました。

入社してもうすぐ３ヶ月が過ぎ、仕事をするという事の意識が大きく変わりました。大学時代の好きな事だけをしているのでなく、会社を維持するための働きを常に求められていることを学びました。

被災した方々の現実を直接に感じる機会が増えております。仕事を通して震災のことを考えない日々がありません。お客様には、住まいを求めて展示場に足を運んで頂き、やりとりをさせて頂いておりますが、現実には集団移転や増税の問題が関わってきております。

私は、どんな状況でも大学４年間で学んできた「住まう人（使い手）」の立場に立っての生活を考えることを重視しております。そのためには私自身の生活する力も問われておりますので、日々の生活実践の中で、自分を意識的に鍛えることにしております。具体的には、掃除する・洗濯する・料理する等には特にこだわりを持って生活することにしております。自らが生活者でもあり、その生活の中での「行為や道具そしてその空間（場）」のあり様を観察し、常に他者に対して、安全・健康・便利・快適な姿を提供できるデザイン提案を目指そうと考えております。生活することは24時間をデザインすることでもあります。このような認識に立ったのも大学４年間でお世話になった先生方や職員の皆様と多くの仲間と語り合ったお陰であり、心より感謝申し上げるとともに、東北工業大学の更なる発展を心より願っています。

大学生活で得られたもの

（株）秋元技術コンサルタンツ　総務課
河野 映子（こうの ようこ）氏
2012 年　ライフデザイン学部
経営ミュニケーション学科卒
（佐藤夏子研究室）

就職して７月で早3カ月。現在私は営業アシスタントとして業務に関する入札や開札、契約書の作成、協力会社への書類の発送をしています。また、日報整理や電話対応など、事務員としても働いています。全てが初めての事だらけで戸惑うことも多々ありますが、先輩方のサポートを受けながら、早く一人前になれるよう勉強の毎日です。

しかし、早く先輩方に追いつきたいという思いとは裏腹に、思うように仕事がこなせず、落ち込む事もあります。そんな時、落ち込んだ私を励まし元気をくれるのは、４年間で得た学生生活の思い出や、かけがえのない友人達です。学業では、図書館に集まり、講義で追いつかなかった箇所を皆で補いあったり、４年間の集大成ともいえる卒業論文は「東日本大震災における風評被害について」というテーマで代表に選ばれ、メディアテークで発表したりと、貴重な体験もしました。学業以外では、飲み会やキャンプ、スノーボード、旅行や韓国への卒業旅行など、今思い返せば沢山の思い出があります。卒業した現在でも定期的に連絡を取り合い、皆で集まる事で気分転換もでき、休日明けには気持ちをリフレッシュして仕事に取り組むことができます。

思えば、私は経営コミュニケーション学科の一期生として入学しました。新設された学科という事もあり、先輩もおらずこれから始まる新生活を不安に思う事もありましたが、先生方の手厚い指導とサポートのお陰で、日々充実したキャンパスライフを送る事が出来、就職活動が上手くいかなかった時も、親身に相談に乗っていただきサポートして下さいました。一年前の私を振り返ってみると、今後の自分の進路に迷い就職先が決まらず、不安な日々を送っていた事を思い出します。就職難といわれている中で、こうして私が社会人の一歩を踏み出せたのも、キャリアサポートの職員の方をはじめとする、大学関係者の方々、社長や先輩社員の方々、そして友人達の存在があるからだと感じます。こうした恵まれた環境の中で仕事が出来る事に感謝し、早く一人前の社会人として認められるよう、日々邁進していきます。

支部活動報告

【青森県支部】

［ご報告］
シンポジウム「3.11 からまなぶ」　～どう？うごく！？　被災するそのときに…～

青森県支部同窓会は隔年の開催となっており前回2010 年、今回 2012 年が開催の年となっておりました。その間に皆様ご存知の通り、未曾有の大災害 (東日本大震災) が 2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発生いたしました。本県でも八戸市、おいらせ町、階上町等の太平洋沿岸沿いに甚大な被害をもたらしました。なおかつ一年以上たった今も青森県に於いて現在 1,000 人余りの県外からの避難者を受け入れている状況が続いております。

さて、今年の青森は豪雪対策本部が設置されるほどの近年にない大雪でありました。その雪がまだ残る時期から、同窓会及び「3.11 からまなぶ」をテーマとしたシンポジウムの準備を始めました。

東北工業大学同窓会事務局と密な連携を計り、青森県支部会での調整会議も十数回ほど重ね、充実した会にできる様にと進めてまいりましした。

そして、今年は 6 月 9 日 (土) に青森国際ホテルにて 16 時 30 分からのシンポジウム、18 時 30 分からの青森県支部同窓会の開催を迎えることができました。

シンポジウムは沢田康次東北工業大学学長の基調講演をはじめとし、佐藤明同窓会副会長をコーディネーターとしてお迎えしました。また工学部建築学科の渡邉浩文教授、工学部建築学科の新井信幸講師、ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科の佐藤飛鳥准教授の３名をパネリストとしてお迎えして、3.11 以降工大人として携わってきた事例を報告・提供することで同窓生・大学関係者及び一般の方々を交えての活発な意見交換がなされ２時間にわたるシンポジウムも無事終了することができました。

シンポジウム終了後は平成 24 年度東北工業大学同窓会 (青森県支部) が行われました。沢田学長、パネリストの皆様、秋元俊通同窓会会長をはじめとする先生方、役員方、小泉昭一後援会副会長、地元後援会の皆様方を含め、総勢 60 数名の大人数となりまして、近況報告･歓談・名刺交換・情報交換また、クイズ大会など盛り上がりました。当初予定時刻を大きくオーバーし懐かしい顔ぶれとの再会に有意義な時間をすごすことが出来、皆さんとても楽しそうでした。

遠方よりのたくさんの御来賓の出席をいただきまして誠にありがとうございました。また２年後に元気な最高の笑顔でお会いしたいと思います。

最後に関係各位のご協力をいただき、「東北工業大学同窓会主催シンポジウム」の開催及び平成 24 年度同窓会が無事終了できたことをお礼申し上げます。

青森県支部
向井　務
1982 年　土木工学科卒（12 回生）

支部活動報告

【北海道支部】

北海道新幹線 札幌延伸決定

私が学生時代、札幌から仙台に行くには、函館まで鉄道で4時間、青函連絡船が4時間、そして、青森から仙台まで鉄道で4時間の合計12時間をかけ行ったものである。

本年6月末、北海道新幹線札幌延伸が認可されたが、これが完成すると、何んと仙台まで3時間弱で行けるようになるのである。その一方で、完成に至るまでの総事業費は1兆7千億円、北海道負担額も2千9百億円が必要となるそうだ。これだけの巨費を投入して整備するだけの費用対効果が果たしてあるのか否か、首を傾げたくなる所でもあるが、九州に新幹線があって、なぜ、北海道に新幹線がないのかと、不思議に思っていたことも事実である。是非とも、私が生きて元気でいる間に新幹線で仙台まで行けるよう、早期の完成を目指して頂きたいものである。

また、この事業が進められることによって北海道内の企業に受注機会が増えることを願って止まないところでもある。

北海道支部同窓会は相変わらず北海道工業大学との定期戦に合わせ大学との交流を深めて行きたいと考えておりますので、皆さんのご協力をお願い申し上げます。

北海道支部
山口 龍彦
1974年　土木工学科卒（4回生）

【岩手県支部】

岩手県の集いが開催される

平成24年6月2日(土)第3回岩手県同窓生の集いが盛岡市のホテルルイズにて開催されました。岩手県における同窓生のネットワーク構築を目的に、今年で3年連続3回目の開催となります。

今回の集いには 秋元同窓会会長をはじめ同窓会本部、また、齋後援会長他、後援会岩手県支部幹事の方々にも出席いただき、同窓生は県内各地より昭和46年土木工学科卒の菅原克郎さんから平成12年電子工学科卒の関村貴雄さんまで、学部も年齢も異なる約40名近い皆様が出席しました。

3回目となる今回は、過去2回と趣向を変え、新たに各自の自己紹介をプログラムに追加し大いに盛り上がった集いとなりました。過去2回においても出席者間で親交を深めていましたが、同テーブル内に留まっていた感もあり今回の企画へと繋がりました。各自の自己紹介では、工大時代の思い出、現在の仕事内容、また御子息の工大への入学等、1人1人の個性溢れるスピーチに多くの拍手、声援が飛び交い、岩手県支部の結束のより一層の強まりを感じました。

今回の集いは約35名ではありましたが、初めて出席された方々もおり、来年度もより多くの県内在住同窓生の参加をお待ちしております。

岩手県支部
藤原 等
1983年　電子工学科卒
(16回生・窪小谷 研究室)

【福島県支部】

福島県同窓生の集い

本同総会では、「新たなネットワークをめざして」をスローガンに支部活動や支部設立支援等を実施してまいりました。おかげさまで、北海道支部・青森県支部・新潟県支部等が設立し様々な活動を展開しております。そこで、福島県におけるさらなるネットワークの構築を目指し、平成24年6月16日(土)、郡山ビューホテルアネックスにて、初めて福島県同窓生の集いを開催いたしました。

秋元俊通同窓会長の開会挨拶では、震災で被災、風評被害を受けられた皆様に対するお見舞いの言葉、今回の集いの趣旨や同窓会の活動状況、後援会との連携等について紹介がありました。続いて、市川盛次氏（電子工学科昭和45年卒）のご発声により乾杯となりました。参加者は40名弱と少数ではありましたが、懇談の中での参加者全員によるスピーチにおいては、これまでの建築学科や土木工学科卒業生の集いを中心とした活動の紹介、また、名刺交換など盛んに交流が行われました。最後に、阿部悦雄氏（土木工学科昭和47年卒）の音頭で大学歌を合唱し、佐藤明同窓会副会長の三本締で閉会いたしました。

福島県支部

【新潟県支部】

雑感

工大人ネ!!!
土木工学科　2回生・・・・・・
学校の思いは皆さんより持っていないと思う。

しいて言えば『バッハツ』先生。地学の・・・何先生だったかな？　名前は出てこないが社会に出て、30歳を過ぎても『地学の単位が取れない!』夢を見ていたことが懐かしい。

新潟県支部同窓会で何回かお会いしてご挨拶させていただきました。

この同窓会への参加は最初からではなかった。新潟県支部会初代の渡辺会長からの誘いがきっかけである。

今年で何回?の同窓会にこの6月に参加したばかり。最近、若手が参加してきて大変うれしい！　もっと増えてくれるとなお楽しい！　はつらつとした顔・話・夢、聞く我々も大変刺激をもらう。

後援会新潟県支部にも参加させてもらっている。発足当時から比べると大変学生の人数が減り、後援会だけの活動ではさびしい状況になってきた。現在は同窓会と一緒のスケジュールを組み、情報の交換等が共有できるように活動を行っている。

自分の子供が卒業してもがんばって会を運営してくださっている後援会の皆さんには、大変頭が下がります。同窓会メンバーは、まだまだ現役で過ごして行きたいと思っていますが、それ以上に同窓会への参加が私達の必須仕事になっているのは間違いない様だ。
やはり…『工大人!』かな？

新潟県支部
芳賀 修二
1972年　土木工学科卒（2回生）
守谷商会勤務

第28回
定時総会のお知らせ

開催日時：平成24年10月6日（土）
会　　場：仙台国際ホテル
定時総会（桜の間）／16：30〜17：30
懇親会（広瀬の間）／17：30〜19：30

■議題
①平成23年度事業報告 ②平成23年度決算報告
③平成23年度監査報告 ④平成24年度事業計画
⑤平成24年度予算案　⑥役員改選その他

懇親会参加費：3,000 円

※参加費は当日会場にて徴収いたします。
懇親会には多くの先生方もご臨席されます。同級生、研究室やクラブの同窓生等、お誘い合わせの上ご参加ください。

■卒業された皆様へ

東北工業大学同窓会　会費未納の方へ

同窓会会費は会員間のネットワーク化事業、在学生への支援、支部活動の推進、本学および本学後援会との共同事業等を進めるために有効に活用しています。同窓会会費未納の方は、別紙郵便振替通知書で、早急に納入いただきますようお願い申しあげます。

終身会費　20,000 円
（5,000 円×４回・10,000 円×２回の分割納入方法もございます）

郵便振替口座
02280-5-22263　東北工業大学同窓会

※すでに納入済の会員には郵便振替通知書は同封しておりません。
本会運営の趣旨をご理解の上、この通知をご御容赦ください。

新たなネットワークをめざして

東北工業大学同窓会

事務局：東北工業大学キャリアサポート課内
〒 982-8577　仙台市太白区八木山香澄町 35-1
TEL.022-305-3336　FAX.022-305-3337
URL.http://www2.odn.ne.jp/ 〜 aan98460/
E-MALE.dousoukai@tohtech.ac.jp